

# 周防大島中学校 研修通信

vol.10

## 第1回 BST を終えて

第1回 BST が終わりましたが、各クラスの様子はどうだったでしょうか。私自身は、1年の教室にいましたが、数学と英語の問題に熱心に取り組む姿が見られました。どちらの教科も本当に基礎的な内容でしたが、苦戦していた生徒も多くいました。特に数学の問題では、割合の問題が解けない生徒が多いのが気になりました。また、英語では、中1で身に付けておくべき単語が書けないことが原因となって英文が完成しない生徒が多く見られました。1時間の実践でも、生徒たちの積み残しがよくわかりました。研修の共有フォルダに「BST 気づき」というエクセルファイルをつくっていますので、その週の BST で気になった点や課題を簡単でよいので記入していただくと次回以降、次年度以降の指導に生かします。ぜひご協力よろしくお願いします。

## 実行機能について②※実行機能＝目標に向けて自分を制御する力

少し前から、教育業界で「非認知能力」という言葉が流行しています。さまざまな知識人が非認知能力について述べていますが、科学的根拠に乏しいものも多く、真偽をしっかりと判断していく必要があります。しかし、将来を幸福に生きていくために非認知能力が重要であることは、間違いないようです。

この非認知能力は、大きく分けると「目標を達成する力」「自分に向き合う力」「他人とつきあう力」の三つに分類されます。この「目標を達成する力」を構成する要素の一つに、「実行機能」があります。日本ではあまり馴染みのない言葉ですが、世界的には広く使われている概念です。近年の複数の研究から、実行機能は IQ よりも子どもの将来に大きな影響を与えることが分かっています。また、欧米で行われた長期縦断研究(1000人以上の子どもの30年以上追跡した研究)では、実行機能が低い場合、将来にわたり健康面・経済面・犯罪面・家庭面など、さまざまな側面で影響を受けることが実証されています。

では、実行機能はどのようにして子どもたちに育てられていくのでしょうか。最も重要だと考えられているのは、子どもが養育者と安定した関係性をしっかりと築くことです。発達心理学者の森口氏は、「目の前のことを優先し、今を生きる子ども」と、将来に備えて「未来を生きる子ども」との間に生じる発達格差の要因として、親などの最も身近な他者を信頼できない状況を挙げています。他者を信頼できるからこそ、今よりも未来を優先して我慢することができ、将来のお返しを見据えた向社会的行動(思いやりのある行動)を取ることができるようになるのです。さらに、支援的・管理的といった子育ての在り方などの子育ての質に加え、家庭におけるルールづくり、睡眠、メディア視聴、親の精神的健康、居住地域なども、実行機能に影響を与えるとされています。

他者への信頼は、もちろん両親の影響が大きいものですが、親以外の子どもに身近な大人との関係の中でも芽生える可能性があります。実行機能を直接的に伸ばす特效薬は、今のところ存在しないのが現状です。しかし、少しでも子どもに「大人は信頼してもよい存在だ」と感じさせることが、現時点で考えられる最も有効な方法なのかもしれません。

### 【参考文献】

森口佑介『自分をコントロールする力 非認知スキルの心理学』講談社現代新書 2019年

森口佑介『子どもの発達格差 将来を左右する要因は何か』PHP 新書 2021年